氷見市埋蔵文化財調査報告第35冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅱ

２００２年３月

氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅱ

２００２年３月

氷見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた霊峰立山を仰ぐ氷見市は、古くより海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

平成10年、日本海側最大の前方後方墳である柳田布尾山古墳発見は、大きなニュースとして市民に受け入れられ、改めて氷見地域の古墳時代の様子に興味が示されるようになりました。

氷見市では市内の古墳の現況を把握するため、3カ年計画で丘陵地区の分布調査を計画しました。本書はその第2年次の報告書であり、文化財保護・活用の一助となることを願っております。

終わりに、調査にあたりましてご指導・ご協力を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

氷見市教育委員会

例　言

1　本書は、氷見市教育委員会が国庫補助事業として3カ年計画で実施している丘陵部遺跡詳細分布調査第2年目（平成13年度）の報告書である。

2　調査は富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室の指導・協力を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3　調査参加者は次の通りである。

調査担当者：大野　究（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）
廣瀬直樹（氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）

調査補助員：髙川貴祥・山下研・山本教幸・折田晃子・北川康介・佐藤絵理奈・田中俊輔・丹羽直美・林昭男・向島裕・小川卓哉・西本智子・細田隆博・本田晃久・前田尚美・松森智彦・間野達・兎原雄大・久保浩一郎・黒田佳恵・小林みのり・坪田壮登・牧野啓太郎・桝谷史章（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力者：的場茂晃（富山大学大学院人文科学研究科学生）

4　調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、係長坂本研資・主任小谷超・学芸員廣瀬直樹が事務を担当し、課長森静治が総括した。

5　本書の編集・執筆は、大野究が担当した。

6　調査にあたって、以下の機関・個人の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

富山考古学会・氷見市史編さん室・氷見市立博物館
西井龍儀・宮田進一・高橋浩二

目　次

序
はじめに……1
第 1 章……3
第 2 章……8
第 3 章……12
ま と め……15
おわりに……16
参考文献……17

図目次

第1図：調査風景……1
第2図：本年度の調査区……2
第3図：上庄川流域の古墳（1）……5
第4図：上庄川流域の古墳（2）……6
第5図：上田西古墳・上田C遺跡・上田南儀遺跡・上田E遺跡……9
第6図：新保横穴群……11
第7図：中村横穴群……11
第8図：加納蛭子山古墳群と加納横穴群……11
第9図：加納蛭子山A1号墳測量図……13
第10図：加納蛭子山B1～3号墳測量図……14

図版目次

図版1　（1）加納蛭子山A1号墳
（2）加納蛭子山B1号墳
（3）加納横穴群　新発見の横穴
図版2　（1）加納横穴群　新発見の横穴
（2）同上　内部の様子
（3）加納地区　石切場跡か
図版3　（1）加納地区　石切場跡か
（2）上田C遺跡　表採資料
（3）上田南儀遺跡　表採資料（1）
図版4　（1）上田南儀遺跡　表採資料（2）
（2）上田E遺跡　表採資料（1）
（3）上田E遺跡　表採資料（2）

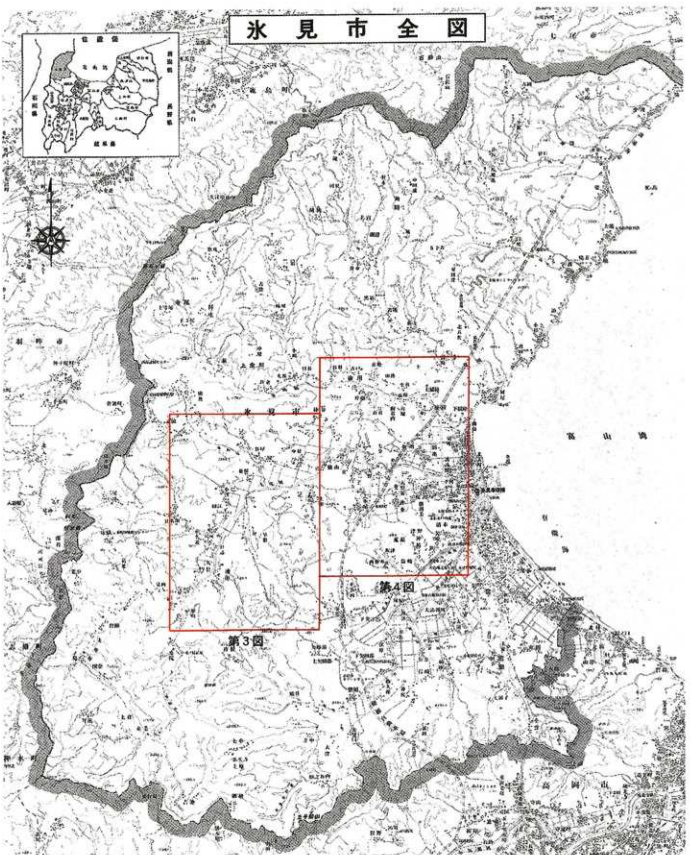
はじめに

氷見市では平成10年の柳田布尾山古墳の発見以後、氷見市史編さん委員会考古部会の調査によって多数の古墳が発見され、また一部の主要な古墳の測量調査が実施された。氷見市教育委員会では市史関連の調査の成果を元に、文化財保護の立場から市内の古墳の現況の把握と確認のため、丘陵地区の分布調査を平成12年度から３カ年計画で実施している。平成12年度は市北部の宇波川・阿尾川・余川川流域の古墳群の現況を確認し、一部の古墳について測量調査を実施した。

本年度は市中部の上庄川流域を対象地区とし、平成13年11月30日から平成14年３月18日までの延べ15日間、踏査及び測量調査を行った。

なお最終年度にあたる平成14年度は、市南部の仏生寺川流域について調査を実施する予定である。

第１図　調査風景



第２図　本年度の調査区

第１章　本年度調査地区の地勢と古墳の分布状況

氷見市は富山県の西北部に位置し、地理的には能登半島の付け根東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、旧太田村を除く氷見郡１町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230㎢、人口は約５万８千人である。

市域は南・西・北の三方が標高200～500ｍの丘陵に取り囲まれ、東側は約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市北半部は上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流から成る谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。市南半部は主として十二町潟が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘から成る。

本年度の調査地区は市中央部の上庄川流域である。上庄川は氷見市南西端の大釜山（標高501.7m）を水源とし、約22kmで富山湾に注ぐ。市内では長さ・流域面積ともに最大の河川である。

古墳は下流の加納地区から中流平野最奥部の触坂地区まで、本流に沿った約９kmの範囲に分布しており、ここは氷見市で最も古墳の集中する地域である。

以下、下流から順に各古墳群について概説する。

１：加納蛭子山古墳群

昭和59年２月西井龍儀氏の踏査で発見され、平成12年２月唐川明史の踏査によりＣ・Ｄ支群が追加された。今回、Ａ１号墳とＢ支群の３基について、測量調査を実施した（第３章参照）。古墳の所在する丘陵の南側と東側の斜面には、加納横穴群が立地している（第２章参照）。Ａ支群は帆立貝形古墳１、前方後円墳１、方墳１、円墳２、Ｂ支群は前方後円墳１、方墳２、Ｃ支群は前方後方墳１、方墳５、Ｄ支群は円墳２の計16基から成る。同じ丘陵西側に所在する木谷城跡関連と推測される中世の遺構が及んでおり、Ａ支群については古墳の改変が著しい。

２：加納新池古墳群

平成11年12月氷見市史編さん委員会考古部会（以下、市史考古部会という）の踏査で発見された。墳形ははっきりしないが、前方後円墳１、方墳１の２基と推測される。

３：加納南（中程）古墳群

平成11年12月市史考古部会の踏査で発見された。円墳６基が確認されている。

４：中尾高塚古墳群

平成13年３月市史考古部会の踏査で発見された。円墳２基が確認されている。

５：中尾神子谷内古墳

平成12年１月市史考古部会の踏査で発見された。円墳１基が確認されている。

６：中尾茅戸古墳群

平成12年１月市史考古部会の踏査で発見された。円墳２基から成る。

７：中尾隅崎古墳群

平成12年１月市史考古部会の踏査で発見された。方墳１、円墳４の計５基から成る。

８：中尾喜城古墳群

平成12年１月市史考古部会の踏査で発見された。方墳２基から成る。

９：泉谷内口古墳群

平成12年1月市史考古部会の踏査で発見された。円墳3基から成る。

10：泉往易古墳群

平成12年1月市史考古部会の踏査で発見された。なお、1・2号墳は旧泉19・20号墳である。前方後円墳1、前方後方墳1、円墳2、方墳8の計12基から成る。5・6・7号墳を市史考古部会が測量調査している。

11：泉古墳群

地元では古くから一部の存在が知られており、大正11年8月当時の上庄村役場の依頼を受けた地元青年団が17号墳（鵜塚）を発掘した。また9号墳（鶏塚）は大正年間開墾によって遺物が発見されている。その後昭和56年に橋本芳雄氏・西井龍儀氏・氷見市立博物館の踏査により、20基からなる古墳群であることが確認された。さらに平成11年市史考古部会の踏査で新たな古墳が発見された。なお、これにあわせて丘陵東側の古墳群は泉往易古墳群として独立させた。1・21・22号墳については、平成12年市史考古部会が測量調査を行っている。前方後方墳1、円墳19、方墳5の計25基から成る。特に1号墳は径45mを測り、県内最大級の円墳である。

12：上田古墳群

平成11年12月市史考古部会の踏査で発見された。円墳2、方墳4の計6基から成る。

13：柿谷土谷山古墳群

古墳群の所在する土谷山は、安政4年（1857）から開墾が始まり、その際にいくつかの古墳が壊されたという。平成12年11月市史考古部会の踏査で古墳の現況が確認された。古墳は東支群と西支群に分かれ、東支群は方墳1、円墳3の4基、西支群は円墳20基、計24基から成る。

14：柿谷石戸谷内古墳群

平成13年3月市史考古部会の踏査で発見された。円墳4基から成る。

15：中村粟屋古墳群

昭和56年12月橋本芳雄氏、西井龍儀氏、氷見市立博物館の踏査で発見された。円墳4基が確認されている。

16：中村天場山古墳

古くから古墳の伝承があり、昭和57年と62年の踏査で前方後方墳とされていたが、平成5年氷見市教委による測量調査で前方後円墳と改められた。1基のみの古墳である。

17：上田西古墳

今回の踏査で新発見の古墳である（第2章参照）。

18：イヨダノヤマ古墳群

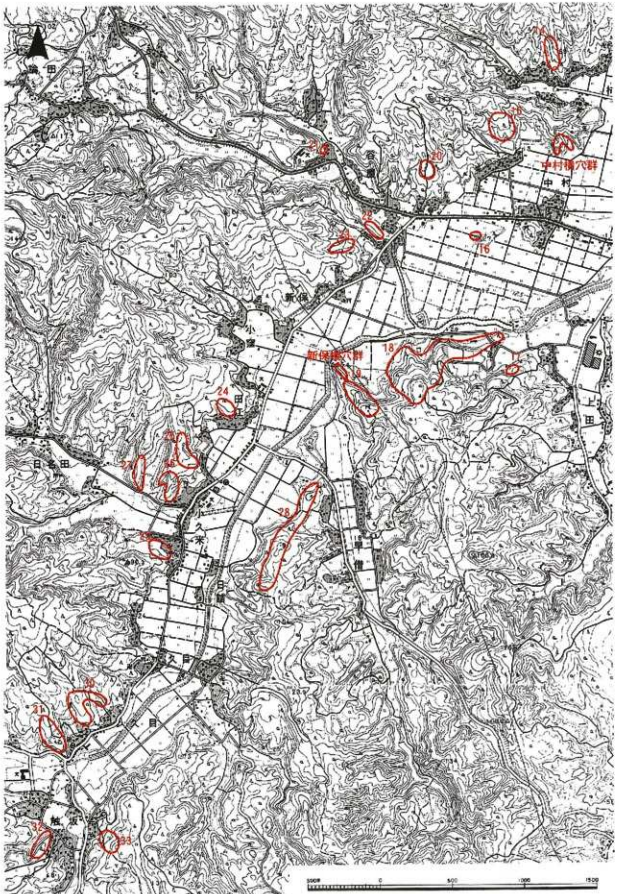
昭和62年西井龍儀氏らの踏査で発見された。円墳4、方墳6、段状墓2の計12基から成る。うち3号墳が平成5年氷見市教委によって発掘調査され、短甲、鉄刀、鉄鏃、鉄鑿、須恵器、土師器が出土している。

19：速川神社古墳群

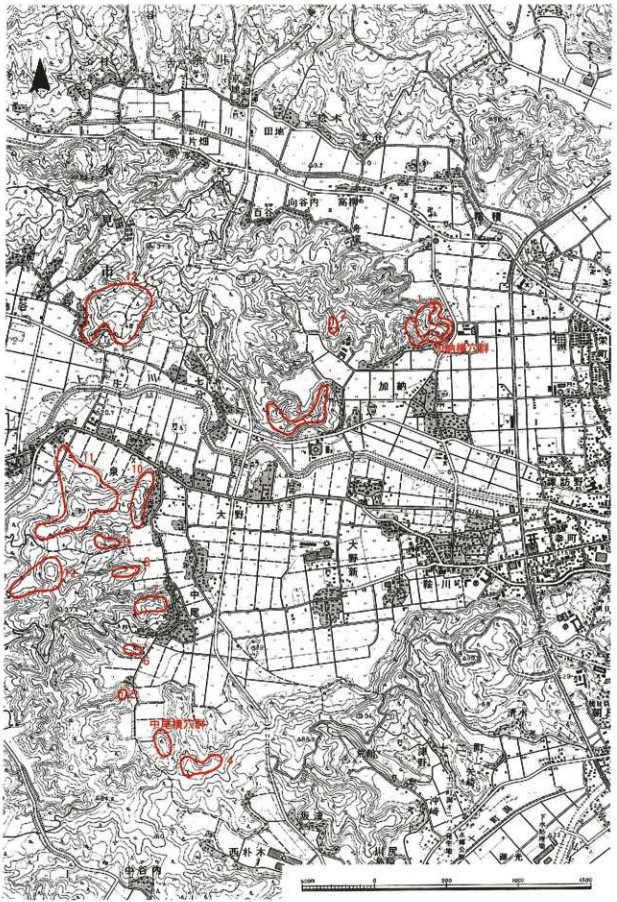
昭和62年11月西井龍儀氏と氷見市立博物館の踏査で発見された。円墳4、方墳4の計8基から成る。

20：谷屋浦出古墳群

昭和41年12月、西井保氏が近くの畑地で子持勾玉や土器破片が表採したのを契機に、西井龍儀氏が発見した。当初は中村粟屋古墳群に包括していたが、場所が離れるため分離された。円墳2基から成る。



第３図　上庄川流域の古墳(1)（番号は本文に対応）　S＝1／25000



第４図　上庄川流域の古墳(2)（番号は本文に対応）　S＝1／25000

21：谷屋新堂出古墳

平成11年11月林寺厳州氏が発見した。円墳１基が確認されている。

22：新保城山古墳群

平成11年11月林寺厳州氏が発見した。方墳２基が確認されている。

23：新保古墳群

平成13年１月市史考古部会の踏査で発見された。方墳３基から成る。

24：田江白山社古墳群

平成12年12月市史考古部会の踏査で発見された。前方後方墳１、円墳２の計３基から成る。うち前方後方墳の１号墳が市史考古部会によって測量調査されている。

25：田江古墳群

昭和62年11月西井龍儀氏の踏査で発見された。円墳４基と推定されている。

26：小久米Ｂ古墳群

昭和62年11月西井龍儀氏の踏査で発見された。円墳８基が確認されている。

27：日名田古墳群

昭和62年11月西井龍儀氏の踏査で発見された。前方後円墳１、円墳２の計３基から成る。うち前方後円墳の１号墳が平成10年、富山考古学会・富山大学考古学研究室の協力を得て市史考古部会が測量調査している。

28：早借ヤワタ古墳群

昭和62年11月西井龍儀氏と氷見市立博物館の踏査で発見された。方墳８、円墳３の11基から成る。

29：小久米Ａ古墳群

大正４年耕地整理中に鉄刀が出土し周知された。円墳２基と推定される。

30：久目梨谷古墳群

平成元年12月久目村史刊行委員会の踏査で発見され、平成12年市史考古部会の踏査で追加発見された。方墳４、円墳13の計17基から成る。

31：触坂古墳群

平成12年12月市史考古部会の踏査で発見された。方墳２、円墳８の計10基から成る。

32：触坂清水古墳群

平成13年２月市史考古部会の踏査で発見された。前方後円墳１、円墳３の計４基から成る。うち前方後円墳の１号墳が同年３月市史考古部会によって測量調査されている。

33：堂谷山古墳

古くから地元では知られ、経塚の伝承もあった。平成13年２月の市史考古部会の踏査により、方墳と推定されている。

第２章　分布調査の成果

第１章に示したように、本年度対象の上庄川流域地域は、氷見市史編さん委員会考古部会による調査が先行しており、一応の成果がまとまっている。そこで今回の調査では刊行が迫り時間切れのため市史考古部会が調査できなかった泉・上田地区について踏査を実施した。また丘陵斜面に位置する横穴群の状況についても上庄川流域では不明な点が多いため踏査による状況確認を行った。

上田西古墳

今回の分布調査で新たに発見した古墳である。

古墳は上庄川中流右岸の丘陵上、標高約40mの地点に立地する。ここは周知のイヨダノヤマ古墳群が立地する丘陵の谷を挟んだ南側にあたる。イヨダノヤマ古墳群が立地する丘陵が途切れ、背後のこの丘陵が平野に開けた場所に古墳は築かれている。

古墳は開墾によって墳丘の南半分が削平されているが、直径約14m、高さ1.5～2.0mの円墳と推定される。現況では周囲に古墳と推定される地形はなく、単独墳と考えられる。採集遺物はなく、古墳の時期を直接示す資料はない。

本古墳の北西には、短甲などの武器が出土した円墳の３号墳（直径20m、中期）を含むイヨダノヤマ古墳群があり、東側の丘陵には泉古墳群・上田古墳群が所在する。泉古墳群は、前方後方墳の22号墳（全長25m、前期と推定）、円墳の１号墳（直径約45m、中期と推定）、大正年間に発掘された円墳の９号墳（鶏塚、直径約15m、後期）などがあり、古墳時代を通して造営された古墳群である。周囲の古墳の状況や立地から、上田西古墳は中期から後期の古墳と考えられる。

上田Ｃ遺跡

周知の遺跡であるが、今回の調査でも遺物を表採した。

遺跡は上田西古墳の南側に位置し、標高約40mの丘陵台地上に立地する。現況は畑地・水田である。散布の範囲は約100m四方で、採集遺物は古代須恵器であり、８世紀代のものであろう。

上田Ｅ遺跡

周知の遺跡であるが、これまでよりも広い範囲で遺物を表採した。

遺跡は上田南儀遺跡南西側の谷にあたり、標高は約20m、現況は水田である。今回は従来より北側の水田で遺物を採集した。採集遺物は古代須恵器（杯・杯蓋・鉢・横瓶・甕）、古代土師器（甕）である。時期は８世紀代のものであろう。

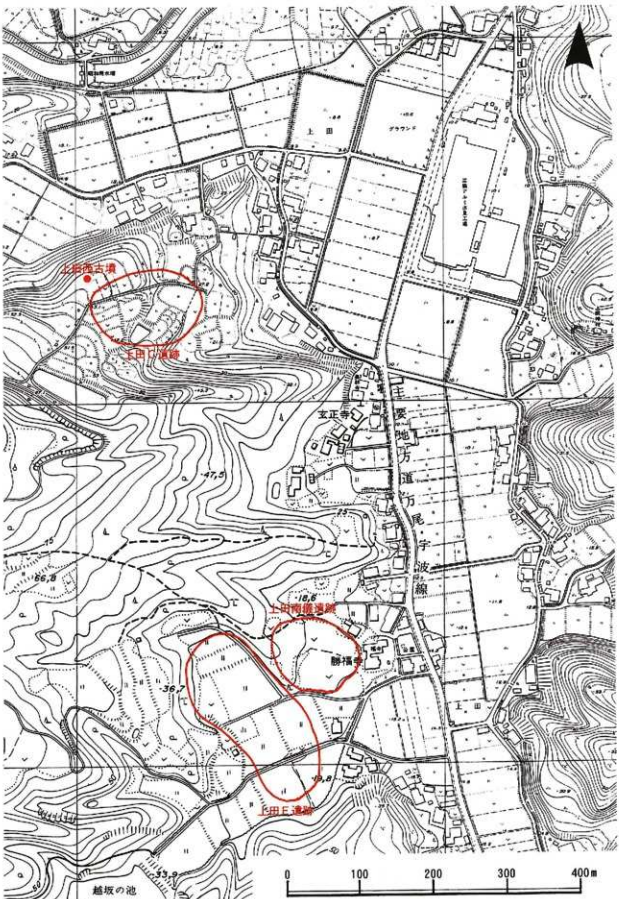
上田南儀遺跡

周知の遺跡であるが、今回の調査でも遺物を表採した。

遺跡は勝福寺背後の台地上に位置し、標高は約25m、現況は畑地である。採集遺物は古代須恵器（杯・杯蓋・瓶・甕）、古代土師器、珠洲（壺）、近世越中瀬戸（壺・灯明皿）などである。須恵器の一部は古墳時代にさかのぼる可能性がある。

中村横穴群

上庄川中流左岸の丘陵斜面に位置し、標高は12～20m、現況は山林である。同じ丘陵の上部には中世の中村城跡が立地する。



第５図　上田西古墳、上田Ｃ遺跡、上田南儀遺跡、上田Ｅ遺跡（Ｓ＝1／5000）

古くから横穴の存在が知られていたが、具体的な位置や数などについては不明であった。今回は踏査による表面観察によって、横穴と推定される穴の確認を行った。

横穴は、南に向かって開けた小さな谷の東斜面に４基、西斜面に１基の計５基が確認された。東側の横穴は、やや緩やかな斜面の約50mの範囲に一段もしくは二段にわたって開口するのに対し、西側の１基はやや急な斜面に開口している。採集遺物はない。未開口横穴の存在も考えられるが、現況からは10基前後の小規模な横穴群と推定される。

中尾横穴群

朝日山丘陵の北側に派出した小支丘の東斜面に、伝承では２基の横穴があったとされる。今回踏査を行ったが、ブッシュがひどく、横穴は確認できなかった。

新保横穴群

上庄川中流右岸の丘陵斜面に位置し、標高は20～30m、現況は山林である。同じ丘陵上部には速川神社古墳群が所在する。横穴は昭和２年９月に湊嘉平次氏が発見し、昭和４年７月に林喜太郎氏が、昭和24年に氷見高校歴史クラブが調査を行っている。

横穴は２基が知られるのみで、今回の踏査もこの２基を再確認するにとどまった。状況からみて10基に満たない小規模な横穴群と推定される。なお、本横穴群の前面には新保南遺跡が所在し、昨年度の試掘調査で７世紀を主体とする遺跡と推定されており、本遺跡との関連が注目されよう。

また、本横穴群が所在する丘陵尾根には堀切とみられる遺構が確認された。周辺には他に城跡とみられる遺構はないが、速川神社南側の丘陵一帯は、中世寺院跡と推測される滝尾山遺跡が所在しており、何らかの関連が予測される。

加納横穴群

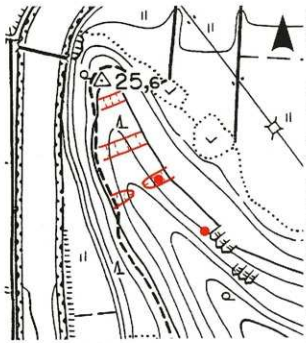
上庄川中流左岸の丘陵斜面に位置し、標高は10～60m、現況は山林である。同じ丘陵上に加納蛭子山古墳群が所在する。

いくつかの横穴は古くから開口していたようであるが、大正11年５月、樹木伐採中の土地所有者が横穴を発見して注目が集まり、その直後大村正之氏が現地調査に訪れた。氷見高校歴史クラブの調査によってこれまでに58基が確認されているが、今回の踏査により従来知られていなかった範囲でも横穴を確認した。

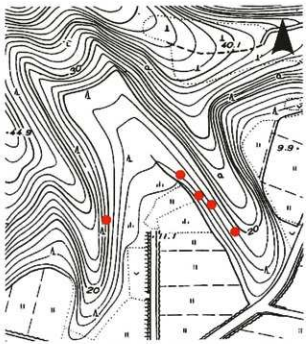
新たに確認したのは、加納蛭子山古墳群Ｂ支群東側の斜面の７基、同Ａ２号墳東直下の２基、同Ｄ支群南東側の10基、さらにその北側の11基の計30基である。これにより、本横穴群は分布範囲がさらに北側へ広がり、また横穴の数も全部で88基となった。未発見の横穴の存在もなお予測され、全部で100基前後の横穴群となるであろう。

北陸では、石川県加賀市の法皇山横穴群において79基が確認され、総数では約200基と予測されているが、本横穴群はそれに次ぐ大規模な横穴群となる。

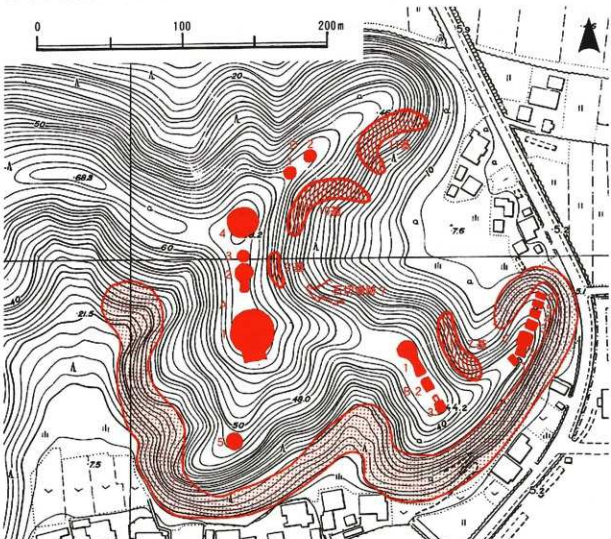
なお、Ａ１号墳東側の斜面で、高さ８m以上に垂直に切り立てられた遺構を確認した。確実な時期・性格は不明であるが、石切場跡と推定しておきたい。



第６図　新保横穴群（●印が横穴）　S＝1／2500



第７図　中村横穴群（●印が横穴）　S＝1／2500



第８図　加納蛭子山古墳群と加納横穴群
（網点が周知の横穴分布範囲、波線が新発見の横穴分布範囲）　S＝1／2500

第３章　測量調査の成果

本年度は加納蛭子山Ａ１号墳・Ｂ１～３号墳の測量調査を実施した。

加納蛭子山古墳群は、上庄川中流左岸の丘陵上に立地する古墳群であり、同じ丘陵斜面には加納横穴群が所在する。古墳群は昭和59年２月に西井龍儀氏が発見し、円墳５基から成る古墳群とされた。その後氷見市史編さん委員会考古部会による分布調査によって墳形や数が見直される一方、平成12年２月には唐川明史氏によってＣ支群が発見された。現段階ではＡ～Ｄ支群計16基から成ると推測している。

これらのうち、Ａ１号墳は氷見市稲積オオヤチＡ１号墳と並んで、県内では確実な例の乏しい帆立貝形古墳である可能性が指摘され、Ｂ支群には前方後円墳とみられる古墳が存在し、重要視されているところである。そこで今回Ａ１号墳とＢ支群の３基の古墳について測量調査を実施し、基礎的な資料とするものとした。

測量は、Ｂ支群中にある三角点を基準レベルとし、縮尺百分の一、等高線間隔25cmの平面図と、各古墳２方向の断面図を作成した。

加納蛭子山Ａ１号墳

古墳群中最高所の尾根頂部南端に立地する。墳頂部の標高は約70mである。ここからは北・東・西それに南に２本、計５本の尾根が派出しており、古墳は自然地形を最大限に利用して築造されている。発見当初は円墳とされたが、その後の検討により、南側に張り出し部をもつ帆立貝形古墳と推定された。

測量調査の結果、谷部の崩落が著しく完全な復原は難しいが、磁北の南北にほぼ主軸を向けた帆立貝形古墳と考えた。主な数値は全長約32m、幅約32.5m、高さ約６m、張り出し部幅約15m、墳頂部広さ10.5×13.5m、張り出し部平坦面広さ3.5×20m、張り出し部高さ約1.5mである。

なお、Ａ支群の所在する尾根を中心に、古墳群周辺には中世山城の遺構とみられる堀切・テラス・切岸状の斜面などがある。このような防御遺構は古墳群西側丘陵上にも点在し、さらにその西側標高約110mの地点には木谷城跡が所在する。

こうしたことから、古墳群周辺は中世に山城の一部として利用されていたと考えられる。従ってＡ１号墳頂部南にある一段高い遺構や、西側裾に連続するテラス状遺構は、防御施設として改変されたものと考えたい。

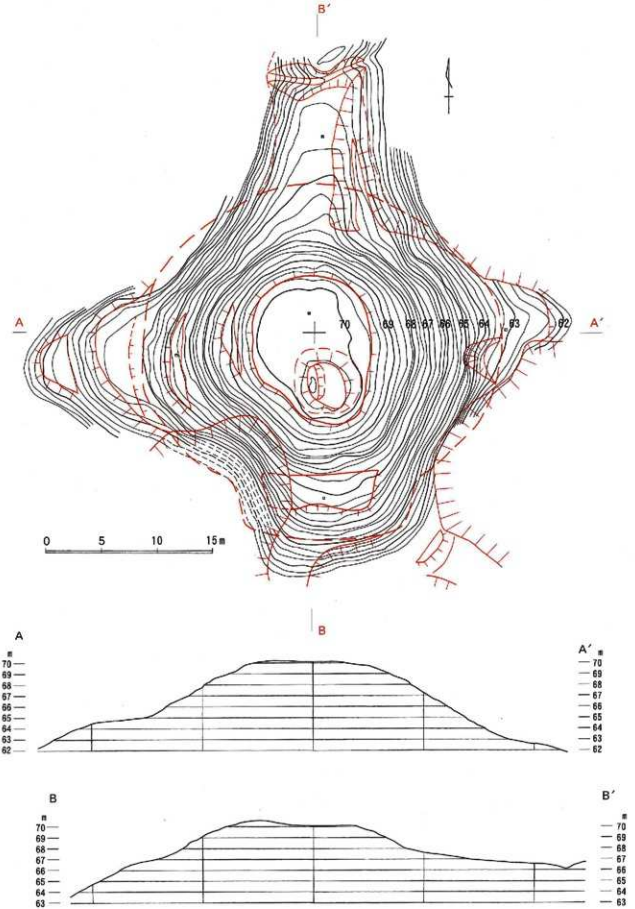
加納蛭子山Ｂ１～３号墳

Ｂ支群はＡ支群から南東側へ下る尾根に位置し、現況では３基の古墳が確認されている。

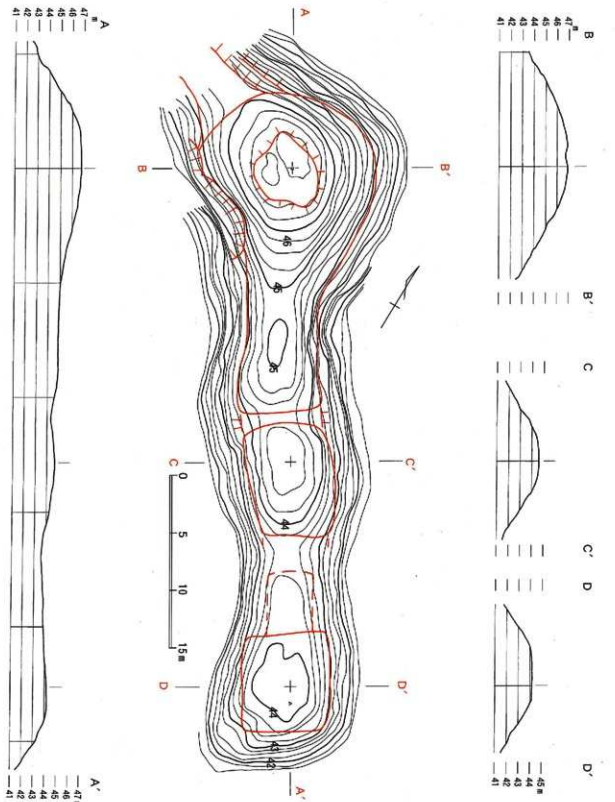
Ｂ１号墳は前方後円墳であり、全長約28m、後円部幅約15m、前方部幅約７m、後円部高さ約2.5m、前方部高さ約１mである。くびれ部が不明瞭な墳形である。

Ｂ２号墳は方墳であり、長さ10×８m、高さ約1.2mである。

Ｂ３号墳は山道などで地形が曖昧であるが、長さ８×８m、高さ約１mの方墳と復原し、北西側に長さ約５mの前方部もしくは張り出し部がつく可能性を指摘しておく。



第９図　加納蛭子山Ａ１号墳測量図（Ｓ＝1／400）



第10図　加納蛭子山Ｂ１～３号墳測量図（Ｓ＝1／400）

ま と め

加納蛭子山古墳群16基のうち4基の測量調査を行った。いずれの古墳も直接古墳の時期を示す資料は今のところないが、おおよその時期について検討しておきたい。

まずB支群については、3基の古墳が尾根上にほぼ接して並んでいる。B1号墳は前方部が狭長で、くびれ部の不明瞭な形態を呈することから前期の古墳と考えたい。B2・B3号墳も低平な墳丘を呈し、後者は前方後方形を呈する可能性があることから、やはり前期の所産であろう。従って、B支群の古墳は連続して築造されたと思われる。

一方、A1号墳は帆立貝形古墳と考えられることから、中期の築造と考えたい。

B支群の下方の尾根上にはC支群が所在し、ここにはB支群よりさらに小規模で低平な墳丘をもつ前方後方墳1と方墳5の6基が一列に築造されている。

従って本古墳群は、まず弥生終末期から古墳時代初め頃にかけて低位置のC支群が、続いて古墳時代前期に中位置のB支群が、さらに古墳時代中期に高位置のA1号墳が築造されたと推測される。またA支群の残りの古墳はA1号墳に後続して築造され、D支群は古墳時代後期の築造であろう。

このように本古墳群は古墳時代を通して築造されたものと考えたい。

おわりに

上庄川流域では今回の調査成果を含めると、33古墳群205基の古墳が確認されたことになる。氷見市で最も古墳の集中する地域といえよう。

この地域の古墳分布の特徴を、ここでは次の2点からとらえておきたい。

まず第一は、分布の範囲が下流の加納地区から中流最奥部の触坂地区までの広範囲にわたることである。古墳時代に上庄川流域が積極的に開発された要因としては、氷見市域で最も広く安定した平野が開け農業生産に適していたことと、臼ケ峰越えのルートをはじめとする能登と結ぶ街道がこの谷を通っていたことがあげられよう。

第二には、下流地域の卓越があげられよう。今回一部の古墳について測量調査を実施した加納蛭子山古墳群は、古墳時代初頭から後期まで継続して古墳が築かれたと考えられる。またその斜面に所在する加納横穴群は、今回の分布調査により88基、推測で100基程度の大規模な横穴群であることが判明した。下流地域の集団は古墳時代を通して勢力を維持していたといえよう。そしてこうした様相は、昨年度報告の阿尾・稲積地域と通じるものであり、上庄川下流に形成された潟と富山湾を臨むこの地域が、古墳時代を通して氷見の中心であったと推測できる。

付記

今回の報告は、氷見市史編さん委員会考古部会による調査の成果を多く含んでいる。これらは本来市史で公表すべきものであるが、本調査の目的が埋蔵文化財包蔵地の範囲・現況の把握し、その保護措置の基本資料とすることであり、最新の情報を提供することが重要であることから、包蔵地の範囲等の基本的な事項について掲載した。なお、詳しい成果については平成14年度刊行予定の『氷見市史資料編　考古』を併せて参照願いたい。

参 考 文 献

大野　究　1990　「久目村の考古資料」『久目村史』

大野　究　1998　「イヨダノヤマ３号墳」『氷見市立博物館年報』第16号

大野　究　1999　「日名田１号墳測量調査」『氷見市立博物館年報』第17号

岡本恭一　1984　「加納横穴墓群」『氷見市立博物館年報』第２号

上庄村史編纂委員会　1963　「上庄村史」

富山県立氷見高校歴史クラブ　1950　『富山県氷見地方横穴古墳調査報告書』

富山県立氷見高校歴史クラブ　1955　「加納横穴古墳発掘報告」『氷見高校歴史クラブ報告書』第５号

富山県立氷見高校歴史クラブ　1964　『富山県氷見地方考古学遺跡と遺物』

富山県立氷見高校歴史クラブ　1966　「加納西第22・23号横穴古墳発掘報告」『氷見高校歴史クラブ報告書』第12号

富山考古学会　1999　『富山平野の出現期古墳』

林喜太郎　1930　「熊無村横穴古墳」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第10号

氷 見 市　1999　『氷見市史』９　資料編７　自然環境

氷見市教育委員会　1984　『富山県氷見市小久米古墳群・小久米Ａ遺跡試掘調査報告書』

氷見市教育委員会　2001　『新保南遺跡』氷見市埋蔵文化財調査報告第34冊

氷見市立池田小学校　1975　「水哉－池田小学校と校下の歴史－」

細川真樹　1978　「加納横穴墓群の諸問題」『学叢Ⅱ』高岡第一学園

図　　版

加納蛭子山Ａ１号墳
（北から）

加納蛭子山Ｂ１号墳
（東南から）

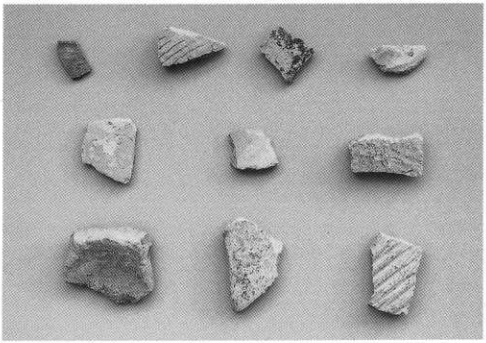
加納横穴群
新発見の横穴

加納横穴群
新発見の横穴

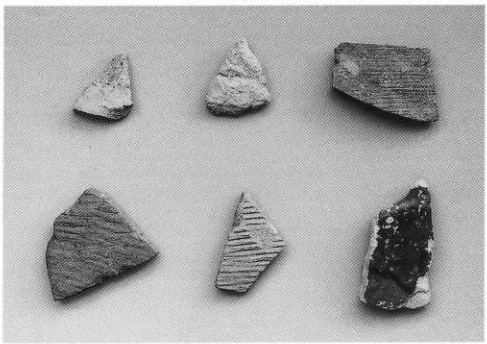
同上
内部の様子

加納地区
石切場跡か

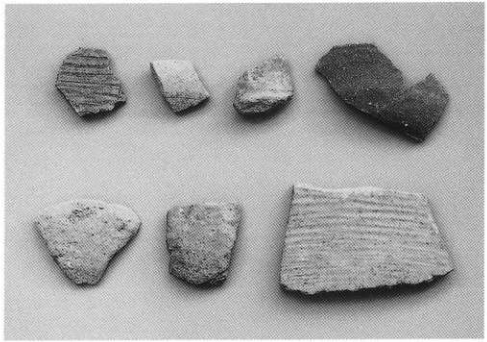
加納地区
石切場跡か



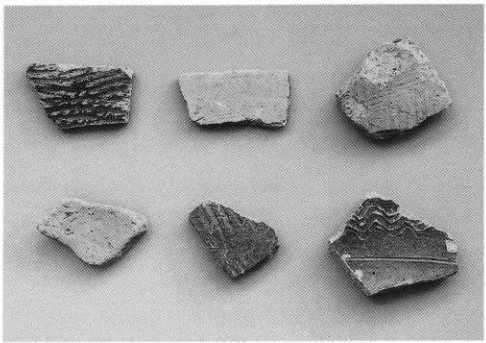
上田C遺跡
表採資料



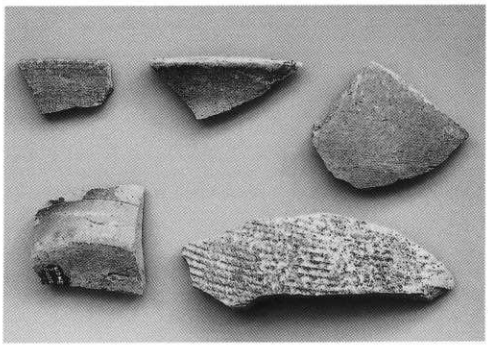
上田南儀遺跡
表採資料(1)



上田南儀遺跡
表採資料(2)



上田E遺跡
表採資料(1)



上田E遺跡
表採資料(2)

平成14年3月25日　印刷
平成14年3月31日　発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第35冊
氷見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区)Ⅱ

編集・発行　氷見市教育委員会
〒935-0016　富山県氷見市本町4番9号
TEL 0766-74-8215（生涯学習課）

印　　刷　有限会社 ひふみ印刷社